

令和2年2月号

◆荒井類 選

《法隆寺、建長寺である必然性》

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規

鐘つけば銀杏散るなり建長寺 夏目漱石

この二句をご覧になって、法隆寺と建長寺には必然性があると思いますか。

- 1 両方とも必然性あり。
- 2 法隆寺には必然性があるが、建長寺にはなし。
- 3 建長寺には必然性があるが、法隆寺にはなし。
- 4 両方ともなし。

《建長寺には必然性がある》

正解は3。法隆寺には必然性なく、建長寺にはそれがある。「柿食へば」の句は法隆寺という必然性があるかどうか論争があるので、絶対に必然性があるという訳ではない、という意味で「必然性なし」。

では、どうして〈鐘つけば銀杏散るなり建長寺〉の建長寺は他の寺ではないのか。

「建長寺の庭を竹箒で掃いたよう」という俗言があり、それは「掃除が行き届いて塵一つ落ちていない様」のことである（小学館「日本国語大辞典」）。

そんな庭に銀杏の葉が散るのである。掃いても掃いても散り落ちてくる銀杏の葉。漱石はそのことを面白がっているのだ。

「建長寺の庭を竹箒で掃いたよう」と言っても今ではその意味がわかる人もほとんどいなくなったから、この句のおかしみも理解されないだろうが、漱石がこの句を発表した一八九五年（明治二十八年）には、この句にニヤッとできる読者がいたということだ。時代が移れば理解されなくなる滑稽句の一例。

《このセーターはどんなセーター?》

セーターをくぐり出て海亀である 吉岡一三

このセーターはどんなセーターだろうか。もちろんタートルネックのセーターだ。と、私は読む。もぞもぞとセーターに頭を突っ込む。「くぐり出て」ようやく頭が出ると、首をもたげた海亀になったというわけだ。滑稽味のある一句である。

ちなみに、タートルネックのタートル (turtle) は「[動]ウミガメ」(ジーニアス英和辞典第五版)。「動」は「動詞」ではなく「動物」。

セーター(タートルネック)と海亀で、ひそかに韻を踏んでいるというのも一興。(隠された押韻)。

《擬人化した面白さ》

夕焼を上手に使う富岳かな 笹木 弘

富岳は富士山のこと。星野高士も、「夕焼けを」「上手に使う」と富士山を擬人化した面白さ」と評している。

上州の頑固に去らぬはたた神 梅田ひろし

〈冬のからっ風と夏の雷は上州名物。雷神図のような形相をして、頑固に陣取っているのが面白い。〉とは、対馬康子の評言。

行く^{ゆく}あきや手をひろげたる栗のいが 松尾芭蕉

木になったまま開いた栗の毬は、まさしく手を広げたようである。そのさまは、掌をひろげて行く秋を呼び返そうとするかのようだ。このほぼ一ヶ月後の十月十二日に、芭蕉は五十一歳で亡くなった。行く秋と門人への惜別の情の託された一句だと思う。私はこれを広義の滑稽句のひとつとしたい。

《参考になる書籍のご紹介》

学校法人神奈川大学広報委員会編、角川文化振興財団発行、『五七五の向こう側』という書籍がある。同書は「神奈川大学全国俳句大賞の授賞式の折に、選者によって行われたシンポジウムを一本にまとめたもの」(同書の復本一郎の言)である。同書には次のような各氏自選の「諧謔の三句」が載っている。

◆金子兜太の諧謔の三句

夏の山国母いてわれを 与太^{よた} と言う
酒やめようかどの本能と遊ぼうか
秋高し仏頂面も俳諧なり

◆宇多喜代子の諧謔の三句

月と日の位置あいまいに花菜畑
かぶとむし地球を損なわずに歩く
ひざ掛けも眼鏡もずれてこの刹那

◆大串章の諧謔の三句

ひたすら種を播き続けをり種見えず
迎火を焚けば生者の寄りきたる
討入りの日は家に居ることとせり

◆黛まどかの諧謔の三句

大願をかけて藪蚊に刺されけり
菊着せられて弁慶の立往生
風の道ふさいで母の大昼寝

これら各氏自選の「諧謔の三句」を見ることだけでも、多くの滑稽俳句協会の会員の皆様には、おおいに参考になるものと思う。これからさらに詳しく紹介していきたい。
(文中敬称略)